
救世主の色は朱

柳 かえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主の色は朱

【Nコード】

N5164BA

【作者名】

柳 かえる

【あらすじ】

稀代の大災害？落日？から半年。

『不死鳥の国』の山間部で羊飼いを営む少年エミルは、？落日？以降この国に漂う言いようのない閉塞感を感じつつも、日々の暮らしを続けていた。

そんなある日の夕暮れ時、エミルは自らを『神』だと名乗る女性ミスラに出会う。

訝しがるエミルに対してミスラはこう言い放つ。

「私と契約して、救世主になってほしいのだ」

ミスラから告げられる『不死鳥の国』と世界を取り巻く真実。
崩れかけた世界のただ中でエミルが選り取った『灰色の未来』とは
？

Prologue / エミル・シェーファーについて

エミル・シェーファーは、ある日突然この世界の救世主になった。だが、彼が何か特別な力を持っていたかといえば、そんなことはなかった。

彼は他の子供達と同じように無自覚で、無関心で、向上心のない普通の少年だった。

ならばなぜそんな普通の少年がその国を救うという大役を仰せつけられたのか？

それは、ごく単純な理由だった。

その日、エミルふとこう思ったのだ。

何でもいいから世界が変わればいいのに、と。

それはエミルが15年というさほど長くもない人生を生きてきた中で自然と心の中に浮かんだ感情だったし、それ自体が特別な考えだったとも言えない。なにより、彼の中に変革の明確なヴィジョンというものがなかった。

だから エミルは単に思っただけなのだ。

なんとなく。それとなく。深い意味などなく。

ただ『どうにかなればいいのに』という無責任な願いを世界に捧げただけ。

しかし、幸か不幸か世界はその願いを聞き入れた。

『お前がこの世界を救え』という無責任な指示と共に。

世界という秩序が、彼のような茫漠さを受け入れたのは決して偶然などではない。

他の何よりも、それが世界にとって最も重要なことだったからだ。その方向性や願いに差はあれど、エミルと時を同じくして『この世界を変えたい』と願った人間たちが6人いた。彼らは地位も、思想も、性別も、願いも、まったく異なつた6人だった。しかし、今の世界を壊してでも明日という灰色に手を伸ばしたい。そういう

人間たちだった。

世界にとつて、重要なのはそれだけだった。

世界は硬直を、停滞を、均質化を嫌う。常に変化を希求し、その存在を揺蕩わせている。

だから、世界にとつて彼らの人間としての側面などどうでもいいことだったのだ。

ただ一点、世界の変革を望んでさえいれば、それで。

だが、どうしようもなく複雑で、どうしようもなく歪いびつなこの世界を前にして、途方に暮れない人間がいるだろうか？ 否。大抵の人間はそこで考えることを止めてしまっただろう。何故なら、それはほとんど無意味な行為だからだ。世界という巨大な枠組みに対して個人ができることなど皆無に等しいし、誰もがその矛盾を胸に抱えながら今日を生きている。そして、何よりそんなことを続けるのは辛すぎる。

だが、エミルはその矛盾の糸をほどき、二本の白糸と黒糸を分かつことを強いられた。

？世界を変える？ということとはつまり 権利などではなく義務

なのである。

……だからといって、彼が仕方なくこの世界の救世主になったというわけではない。

なぜなら、エミルはその時たしかに世界の変革を望んだからだ。

今という幻想を否定し、未来という灰色を選びとろうという意思が間違いなく彼の中にあつたからだ。黒でもなく、白でもなく、確かな約束など何一つない1m先の暗闇に手を伸ばそうとする。そういう意志が。

たとえそこに意思がなく、願いもなく、自我エゴすらなくとも、エミルは骨接ぎを繰り返すこの廃墟のような世界に、炎を放つことを決めた。そこに、光があると信じていたから。

エミル・シエーフアーは、こうしてこの世界の救世主メシアになった。

Prologue / エミル・シェーファーについて（後書き）

はじめまして。柳かえると申します。

自作のファンタジー小説のプロローグ部分を載せてみました。

完成版の掲載はもう少し先になりそうですが、よければ読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5164ba/>

救世主の色は朱

2012年1月14日11時52分発行